

After コロナ時代へ向けた教育

副研究院長（教育担当） 獨古 薫

新型コロナウイルス（COVID-19）が引き起こした 2020 年からのコロナ禍により、教育も未だ大きな影響を受けていますが、理工学府と理工学部の 2021 年度は感染拡大防止に留意しながら With コロナ時代の教育を進めています。2021 年 4 月からは、学内における感染防止を徹底し、講義棟教室の入室定員を通常の 6～7 割に抑えるなどして、本格的に対面授業を再開しました。2021 年夏には変異ウイルス（デルタ株）の流入により本学でも学生の感染者数が一時的に増加したため、秋学期の講義は 10 月末まで原則オンラインになるなどの影響がありましたが、ワクチンの 2 回目接種の普及に伴い感染者は減少したため、11 月より対面授業が再開されました。2022 年 3 月 24 日にはパシフィコ横浜ノースにて、3 年ぶりに卒業式・大学院修了式が行われ、理工学府では博士（理学）5 名、博士（工学）14 名、修士（理学）77 名、修士（工学）268 名に学位を授与し、修了生を送り出しました。理工学府の入学選抜では、2021 年 10 月入学および 2022 年 4 月入学の試験を 2021 年 8 月に実施しました。感染防止を徹底して、主として筆記試験により行いましたが、日本に入学できない留学生等にも配慮し、一部はオンラインでの試験を実施しました。博士課程前期は、各専攻ともほぼ入学定員を充足しており、定員の 105%以内で管理できています。博士課程後期に関しても、定員 41 名に対して 2018 年度は 41 名、2019 年度は 48 名、2020 年度は 51 名、2021 年度は 47 名と順調に推移しており、学位授与機関としての実績を積み重ねています。理工学府では、2022 年 4 月に国立研究開発法人物質・材料研究機構 (NIMS) との連携大学院プログラムとして、機械・材料・海洋系工学専攻と化学・生命系理工学専攻の博士課程後期にエネルギー材料教育分野を新設し、持続可能社会に向けての研究者育成プログラムを発足させました。今後も外部機関や企業等と連携して理工学府の教育プログラムを充実させていく予定です。さらに、学生の入学から社会へ輩出するまでの取り組みや教育戦略について学外有識者から助言又は提言をいただく理工学府運営諮問会議を 2021 年に設置しました。早速、2021 年 7 月に開催された第 1 回諮問会議でいただいた意見を踏まえ、2022 年度から博士課程前期 PED プログラム（実務家型技術者・研究者を育成する教育プログラム）の改革を行いました。今後も継続して理工学府の教育改善の取り組みを進めていきます。

理工学府では、研究中心の大学院を目指し、博士課程前期で論文の著者となった学生に対する 顕彰制度を 2017 年度から設け、学生が執筆した英語論文の英文校閲料を支援する予算を学長戦略経費として獲得するなど、学生の研究活動を支援しています。その結果、このような論文が 2017 年度は 88 本、2018 年度は 114 本、2019 年度は 143 本、2020 年度は 138 本、2021 年度は 140 本となりました。コロナ禍にもかかわらず論文が大幅に減少することはなく、アクティビティをコロナ前と同レベルに維持できています。このような取り組みを継続することで、学生の論理的思考力を養い、工学研究院の研究力向上に繋がっています。

2022 年 4 月から第 4 期中期計画の期間に入りましたが、ここでは博士課程後期学生への経済的支援の強化や社会人向けのリカレント教育の充実などが計画されており、外部機関や企業等とも連携を強化しながら、理工学府の教育を改善していく予定です。また、2022 年秋からは理工学部講義棟 A の改修が予定されており、授業科目の教室を一部変更しながら対応する予定ですが、この改修を機に After コロナ時代にマッチした教育環境を充実させていきたいと考えています。

2021-2022
Highlights

教育のハイライト